

さくら新道駅：演

— 高齢者と触れ合うおもてなしの場 —

R09093 渡部 真也
指導教員 澤田 英行

I. 背景

都市化が進むにつれて、私たちの生活は合理性を求めながら日々進化を遂げた。都市部では、高齢化率が増加し、単身高齢者が非常に多くなった。そして、向こう三軒両隣のような地域コミュニティが希薄化し、高齢者と関わる機会が少なくなっていた。

II. 問題提起

地域コミュニティが希薄化してきた場所に対し、地域への帰属意識を再認識させ、お互いを意識し合える場所が必要である。この場所に、地域の人々だけではなく来訪者を呼び込むことで、老若男女全ての世代が集結する新しい出会いの場をつくる。

III. 対象敷地

王子駅から徒歩1分のところに飛鳥山公園がある。飛鳥山を桜の名所に仕立て上げたのは、八代将軍徳川吉宗だった。こうして江戸の新しいお花見の名所として誕生した飛鳥山は、当時、桜の名所地では禁止されていた酒宴や仮装が容認され、「憩いと出会い」の場として老若男女全ての世代に親しまれるように計画された。

IV. 敷地分析

高齢化などの問題を抱え、高齢化対策に力を入れている王子。その為、高齢者の活動は現在も保持されている。高齢者は飛鳥山公園を散歩コースとして利用したり、常設されている施設を利用している。しかし、時代の変遷とともにこの場所は衰退していった。それは、飛鳥山公園の東側面にある崖が周辺に対して境界をつくっているからではないだろうか。

■問題点



◇飛鳥山公園の東側面

■敷地写真



◇西側面に繋がるスロープ



◇高齢者の活動



◇大道り沿いにある桜並木



◇定期的に行われるイベント



◇飛鳥山公園内にある店舗



◇沢沢栄一記念館

■5W1H2F+α

When: 5:00 ~ 17:00

Where: 東京都北区王子飛鳥山公園

Who: 飛鳥山公園を利用する高齢者

What: 劇場 兼 ギャラリー

Why: 地域コミュニティの希薄化

How: 高齢者によるおもてなし

For anyone: JR 王子駅を利用する人

For anything: おもてなしの場

the other side: 桜並木、広場、施設

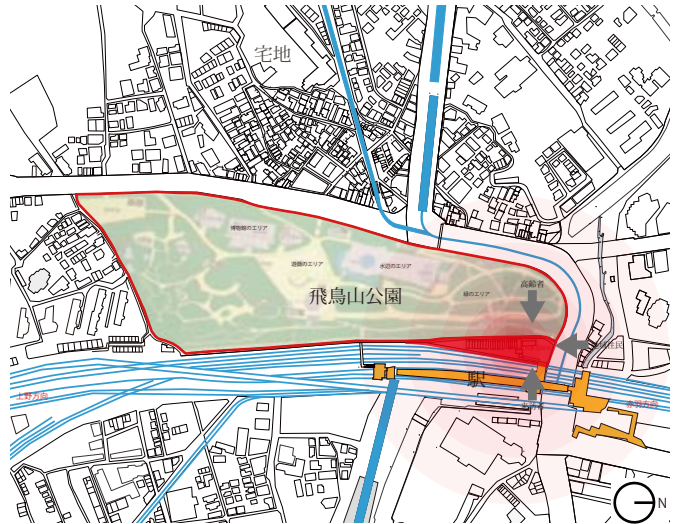


◇飛鳥山公園の全貌

※1. 合理性とは、近代建築以降の機能主義による建築設計手法を示している。

V. 提案

飛鳥山公園の崖面によってできた境界に対し、高齢者と来訪者の出会いの場をつくることで、お互いにこの場所を再生し、活気あふれる場所にする。また、その場所に演出空間をつくることで、人々が出会い、交流する“きっかけ”を提案する。



■Point
・飛鳥山公園のポテンシャルを生かした設計
・周辺に対するアプローチを大切に設計
・高齢者と地域を繋げる動線計画

■対象敷地
飛鳥山公園
敷地面積: 73,000 m²
用途地域: 第二種低層住居専用地域

VI. ダイアグラム

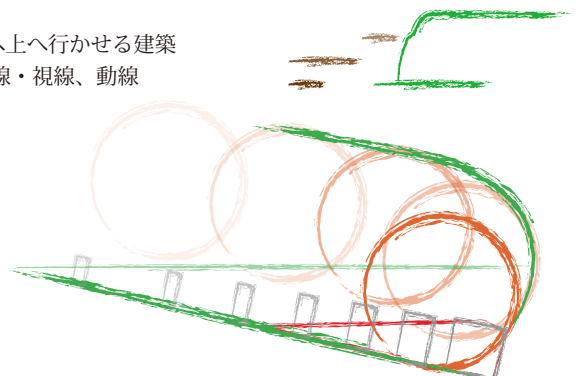
飛鳥山公園に対し、幾何学から敷地を読み取ること、設計プロセスを考えていく。また、ポイントを絞って建築計画を行うことで、全体に広がる個を設計する。

→高齢者、来訪者、地域住民
飛鳥山を繋ぐ建築をつくる

・幾何学の中に運動性を保持する。
→連続性、シークエンス

・大きな運動性の中に建築を
しまいこんでいく。
→奥性、奥行

・上へ上へ行かせる建築
→目線・視線、動線



VII. プログラム

王子周辺にはたくさんのアーティストが住んでいる。しかし、彼らの“発表する場”がこの地には存在しない。そこで、飛鳥山公園に地域に開かれた劇場、ギャラリーを設計することにした。この劇場は音楽・演劇・舞踊等の「鑑賞の場」、地域の人々の「発表の場」、市民の人々や県内外の団体・企業の人々の「会議・研修の場」といった場所が存在する。また、ギャラリーは JR 王子駅と接続させ、「いつでも・だれでも・どこでも」入れるような場にする。



◇鑑賞の場

◇発表の場

◇会議・研修の場

VIII. 設計主旨

飛鳥山公園の崖によってできた境界に対し、高齢者、来訪者を繋ぎ、打開できる建築を挿入する。その際、ダイアグラムより見えてきた2本の境界に注目してそれぞれ別の視点で建築計画をしていく。

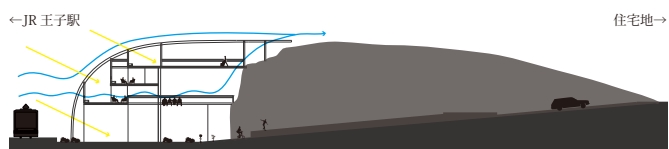


上図は高齢者、来訪者、地域住民の動線を黄、緑、青の3色で色分けして示している。

また、既存の道やスロープを活かしながら飛鳥山公園や桜並木への道のりを示している。



A-A' 断面

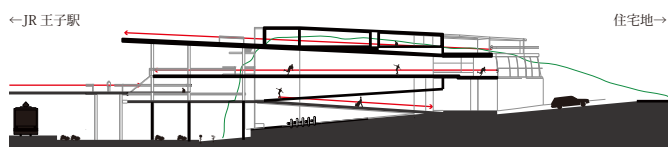


段々にスラブを挿入することで人の視線に変化を与え、飛鳥山公園の見え方に変化を与える。

◇飛鳥山公園 _ Section



B-B' 断面



飛鳥山公園に巻きつく建築を作ること、演出空間を緩やかな傾斜の中で表現していく。

◇飛鳥山公園 _ Section

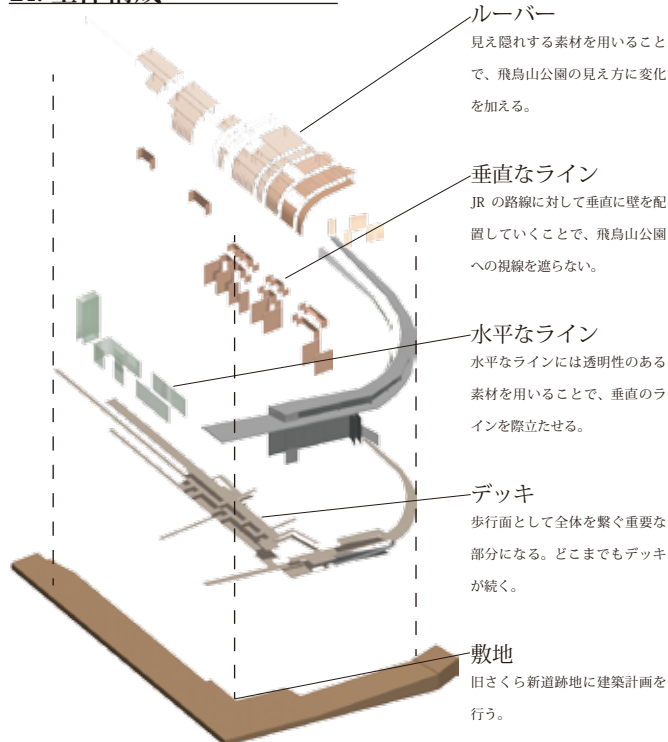


人々は小さい空間⇄大きい空間に誘導される。



◇飛鳥山公園 _ 鳥瞰図

IX. 全体構成



ルーバー

見え隠れする素材を用いることで、飛鳥山公園の見え方に変化を加える。

垂直なライン

JR の路線に対して垂直に壁を配置していくことで、飛鳥山公園への視線を遮らない。

水平なライン

水平なラインには透明性のある素材を用いることで、垂直のラインを際立たせる。

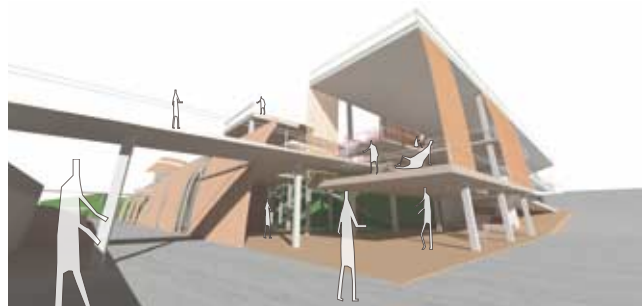
デッキ

歩行面として全体を繋ぐ重要な部分になる。どこまでもデッキが続く。

敷地

旧さくら新道跡地に建築計画を行う。

X. パース



◇main_ エントランス

エントランスから入り、左へ進むとギャラリー・右へ進むと小劇場が広がる。正面は吹き抜けになっており、奥にはアトリウムガーデンがある。この場所から、人々は出会い・交流する。



◇ギャラリー

この場所には、王子に住むアーティストたちの作品が展示され、地域住民の発表の場となる。奥にはアトリウムガーデンが広がる。



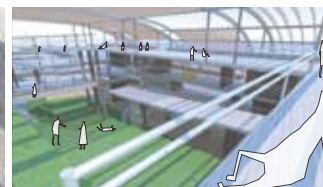
◇アトリウムガーデン

旧さくら新道跡地にアトリウムガーデンができる。既存の道からも展示物を鑑賞することができるので、人々も自然と建築に引き込まれる。



◇JR 王子駅正面のデッキ上部

デッキの上部はルーバーによる空間が広がる。所々、吹き抜けの空間があり、光が注ぎ込む。ブースの中は展示場となっている。



◇飛鳥山公園からの風景

今まで、電車のための風景だった場所に対して人々が集まる“きっかけ”を作ること、交流し、出会う場所ができる。

XI. 参考文献

槇 文彦、若月幸敏、大野秀敏、高谷時彦 『見えがくれる都市—江戸から東京へ (SD 選書)』

寺山 祐策 『エル・リシツキー—構成者のヴィジョン』

Steven Holl 『El Croquis 141』